

フェンリルに  
育てられた

『創作魔法』で  
異世界を

転生少女は  
満喫したい!

3

Arai Ryoma

荒井竜馬

# 登場人物紹介

## アゼルスタン

フリードリッヒと  
因縁を持つ公爵で、  
魔物にまつわる  
危険な研究を  
進める要注意人物。

## エルド

アンを保護した  
心優しいS級冒険者。  
アンのことを家族のように  
想っている。

## シキ

超強いフェンリル。  
お父さんとしてアンを  
育てていたが、  
彼女と従魔契約を  
結ぶことに。

## フリードリッヒ

冷血なイメージを  
持たれている公爵。  
伯父であるという  
以上にアンに執着  
しているようだが……

## ペス

アンの出生の秘密を知る  
ペガサスの子ども。

## シータ

伯爵令嬢。  
意地っ張りな性格だが、  
お菓子作り対決を経て  
アンの親友になる。

## アン

本作の主人公で、  
森の中でシキに育てられ  
自分はフェンリルだと  
思い込んでいた転生者。  
その上、公爵家の生まれで  
あったことまで判明した。



## 第一話 執拗しつように現れる来訪者

いきなりの話になるけど、私——アンは異世界に転生した転生者だ。それもただの転生じゃなく、今流行りのいわゆる幼女転生。

会社帰りに異世界転生ものの小説を買って、少し寝てから読もうと仮眠をとったら——目覚めた時には異世界で六歳くらいの幼女の姿になっていた！

さらに、私は捨て子だったらしく、フェンリルのシキに拾われて育ててもらっていたみたい。さらに、私は異世界版狼少女おおかみしょうじょみたいな境遇きょうぐうで育ったのだ。

そんな私は異世界転生特典なのか、不思議な力をいろいろと持っていた。

その中の一つ、イメージしたものを何でも作れる【創作魔法そうさくまほう】というスキルでたくさん調味料を作ってきた。

そして、そんな調味料を使って屋台を出したところ、魅惑みわくのソースを使う屋台だと有名になってしまったのだ。

私はその力を活かして人を癒いやす料理を作り、ポイズンモスという魔物の毒おしかに侵おかれたエルランドやシニティーの冒険者、そしてエリーザ伯爵はくしややケミス伯爵の体力を回復させてきた。

その途中でシート様という貴族のお友達ができたり、港町ミルドにお店を構えるドーナさんのお店を手伝ったりした。

そんな日々を過ごしていく中で、未知の食材を使って料理の腕を高めていきたい、ゆくゆくはお店を持ちたいという気持ちが強くなっていった。

そして、私はそうした気持ちから、ミルドの街の屋台フェスティバルという屋台飯のお祭りに挑戦することに。

だけどそのお祭りは、私の伯父を名乗るフリードリッヒ公爵という貴族が現れたり、突然ミリオンクラーケンというタコの魔物に会場が襲われたりと、波乱続き。

無事お祭りを終えた時にはほっと胸を撫でおろしたね。

それにしても、実は私が代々王国を守ってきた公爵家の娘——アナスタシアで、その上私の一族は聖獣を使役することができるのだと公爵に言われた時は非常に驚いた。

でも、私には公爵家にいたという記憶はない。

私はフェンリルのシキに拾われて育てられ、エルドさんと出会って屋台や旅をしているただの冒険者のアンだ。

だから、私のことをアナスタシアと呼んで、公爵家の娘として連れ戻そうとするフリードリッヒ公爵のことなんか知らない。

それで私は、屋台フェスティバルの最終審査という公の場で、公爵のもとへ戻らないと宣言した。

ずっと私のことを探していたらしいけど、これでもう追ってくることはないだろう。

そんなふうに、少しだけすっきりとした屋台フェスティバルの翌日。

「アナスタシア。街を出る準備はできたか？」

「……できてませんし、する予定もないんですけど」

私たちの宿にフリードリッヒ公爵がやってきた。

てっきり、外に出ていたエルドさんが戻ってきたのかと思いき、簡単に扉を開けてしまったのが間違だった。

だけど、港町の宿部屋の扉を開けたら公爵が立っているなんて、誰も思わないだろう。

私はそんなことを考えながら、ちらっとフリードリッヒ公爵の両隣にいる人物に目を向ける。

公爵の両隣には、使用人のような男女が一人ずつ連れられていた。

みんな高そうな服を着ており、港町の宿にいるような客層じゃない。

……なんかちよっと圧を感じるんだけど。

「ん？ フリードリッヒ公爵!? なんでここに？」

その時、部屋の外からエルドさんの声が聞こえてきた。

私が顔を外に出すと、眉根を寄せているエルドさんがいた。

ちよほど戻ってきたみたいだ。

フリードリッヒ公爵はエルドさんにすつと片手を上げる。

「アナスタシアを連れ戻しにきただけだ。すぐに出ていくので、気遣いは無用」

「エルドさん。フリードリッヒ公爵はもうお帰りになるようですよ」

「何を言っている？ アナスタシア。君も一緒に来るんだぞ」

フリードリッヒ公爵は私に変なことを言ったかのように首を傾げた。

私はそんなフリードリッヒ公爵の態度に、少し刺々しい口調になってしまふ。

「行きませんよ。昨日、ちゃんとお断りしましたよね？」

「ああ。だから、こうして今日また迎えにきた」

フリードリッヒ公爵は当然のことのようにそんな言葉を口にした。

公爵は私のことを長年探していたのだという。

エルドさんも執念深い男だっけって言ってたけど、まさかここまでだとは思わなかった。

私はため息を漏らしてから、目を細めてフリードリッヒ公爵を見る。

「なんで私たちが泊まっている宿が分かったんですか？」

「フェンリルのような大型の獣が泊まれる宿など限られているからな。大型の使い魔の目撃情報をもとにそういった宿をしらみつぶしに探したまでだ」

「な、なるほど」

ミルドは決して小さな街ではない。

シキの情報をもとに私たちを探そうとしても、それなりに時間がかかるはずだ。

それをあの祭りのあとから、今日までの時間でやってのけるとは。

そこまで考えて、引っ掛かりを覚えた。

……この人、なんでこんなに私に執着しているんだろ？

いくら私の伯父だからと言って、普通ここまでするだろうか？

数年間も私を探し続けて、帰ることを拒否してもめげずに連れ戻そうとしてくる。

一目会って安否を確認したいくらいなら分かるけど、ここまでする気持ちから分らない。

これだけのことをするメリットが、フリードリッヒ公爵にはあるのだろうか？

もしかして……何か裏があるのかな？

私が疑いの目をフリードリッヒ公爵に向けていると、エルドさんがフリードリッヒ公爵との距離

を詰めた。

「フリードリッヒ公爵。アンが戻りたくないと言っている以上、俺もアンを送り出すことはできま

せんよ」

エルドさんはそう言うのと、腰に下げている剣の柄に軽く手を置いてフリードリッヒ公爵を睨む。

「え、エルドさん!?」

私はエルドさんの言動に目を見開く。

同時に、フリードリッヒ公爵の隣にいた男性が、公爵を守るようにしてバツと両手を広げた。

しかし、男性はS級冒険者であるエルドさんを前にして、顔を引きつらせてしまっている。

「あ、あなた、フリードリッヒ公爵に何をしておつもりですか？」

「何もいませんよ。このまま帰ってくればね」

エルドさんが意味ありげな笑みを向けると、男性は体をこわばらせてしまう。

え、エルドさん。公爵相手にそこまでして平気なの？

私がおっかなびっくりフリードリッヒ公爵を見ると、公爵はエルドさんに軽く片手を上げた。

「分かった。今日は一旦帰ることにしよう」

すると、フリードリッヒ公爵の前に立っていた男性が驚いて振り向いた。

「ふ、フリードリッヒ公爵？ よいのですか？」

「ああ。我々がアポも取らずに突然来たんだ。エルド、失礼を詫言わせてくれ」

フリードリッヒ公爵が顔色を変えずにそう言うのと、エルドさんは剣の柄から手を離れた。

「いえ、帰っていただけるのなら、こちらとしては問題ありません」

それから、フリードリッヒ公爵は私を見て口を開く。

「また明日、改めてお邪魔させてもらう。アナスタシア、この街を出る準備をしておくように」

「何度も言わせなくてください。私は帰りません。また明日来ても同じ答えしか返せませんよ」

「明日断られたら、また明後日来る。それだけだ」

フリードリッヒ公爵は淡々とそう言って、お連れの人たちと共に私たちの部屋をあとにした。

とても冗談を言っている感じではなかった。本当にまた明日も来るのだろう。

私はまったく話を聞かないフリードリッヒ公爵のうしろ姿を見ながら、大きくため息を吐く。

「まさか、あれだけきつぱり断つても諦めてなかったとはな。噂以上の執念だ」

エルドさんは頬を掻いて呆れた顔をしていた。

私はそんなエルドさんに頭を下げる。

「エルドさん。助けてくれて、ありがとうございます。エルドさんが来なかったら、多分、あの人もっと粘ったと思いますから」

「気にしないでくれ。むしろ、もっと早く助けにこられたらよかったな」

エルドさんはそう言って、私の頭を撫でてくれた。

それから、何かに気づいたような声を漏らして続ける。

「そういえば、シキはどうしたんだ？ あいつがいたら、フリードリッヒ公爵を宿に連れて入れなそうなものだけだ」

「シキですか？ 夜に少し出てくるって言うてから、まだ戻ってきてないですね」

昨日の夜、屋台フェスティバルが終わったあと、シキはミ里昂クラーケンの死体をしばらく観察していた。

そのあと、気になることがあるからと言って、どこかに行ってしまったのだ。

そして、もう昼すぎだというのにまだ戻ってきていない。

シキ、どこに行ったんだろ？

「しかしあの感じだと、また明日もフリードリッヒ公爵は来るよな。シキが帰ってきたら宿を変えてみるか？」

エルドさんは腕を組んで眉根を寄せていた。

「多分、宿を変えても同じな気がします。あの人、昨日の今日で私たちの宿の場所を見つけたみたいですし」

「そうだよなあ。それこそ、誰かに俺たちを付けさせてでもいたら、簡単に居場所ばれちゃうよな」

「そうですね。そのくらいなら普通にやってきそうです」

私はエルドさんにつられるように眉根を寄せて、ため息を吐く。

それから、さっきまでフリードリッヒ公爵がいた方をじっと見て口を開く。

「エルドさん。あの人はなんで私に執着するんですかね？」

エルドさんは不思議そうに首を傾げた。

「そりゃあ、アンが姪だからじゃないのか？」

「それにしても、少し必死すぎる気がします。公爵の仕事だつてあるはずなのに、あんなに私に固執するのは異常ですよ」

「……そう言われれば、そんな気がしないでもないか」

エルドさんは私の言葉を聞いて、また考え込んでいた。

本当に私に執着して何になるんだろ？

しかし、どれだけ考えてもフリードリッヒ公爵の思いは分からず、打つ手のない私たちはそのまま次の日を迎えるのだった。

そして翌日、さらに次の日と、毎日のようにフリードリッヒ公爵はやってきて、私を連れ戻そうとしてきた。

そのたびにエルドさんと戻ってきたシキと一緒に断っているのだが、フリードリッヒ公爵はまったく折れる様子がなかった。

そして、フリードリッヒ公爵からの誘いを断り続けていたある日。

公爵が来る時間に、宿の周りにいつもと違う魔力がたくさん近づいてくるのが分かった。フェンリルとして生きてきた私は、意識してさえいれればそんなことまで感じ取れるのだ。

魔力に反応したのだろう、シキがすつくと立ち上がった。

「アン。気づいているか？」

「うん。十人くらいはいるかな」

私が頷くと、シキは部屋の扉の方に歩いていく。

すると、そんなシキの動きに気づいたエルドさんが首を傾げた。

「なんだ？ どうしたんだ、シキ」

「あの男の部下と思われるやつらが、大勢でやってきたようだ。あの男、痺れを切らしてアンを強引に連れ帰ろうとしているのだろうな」

エルドさんはシキの言葉を聞いて、難しそうな顔をした。

「……まずいな。そうきたか」

「何を恐れることがある？ 俺一人で簡単に捻り潰せる数だが」

シキはエルドさんの反応を見て、首を傾げる。

確かに、この数ならシキだけでも十分に追い払うことができるはず。

そんなに焦るほどじゃないと思うけど……。

「あつ、そういうことですか」

そこまで考えて、私たちが反撃できないことに気づく。

「アンは気づいたみたいだな。いいか、シキ。俺たちが攻撃すれば、その瞬間に首が飛ぶ可能性がある

あるってことだ。相手は公爵家だからな」

エルドさんはそう言っただけのため息を漏らした。

そう。フリードリッヒ公爵は貴族。それも公爵の位を持つ上位の存在だ。

以前、エルドさんが剣の柄に手を置いた時にもヒヤッとしたが、多分あれがギリギリのライン。

もし実際に戦いでもしたら、私たちはすぐさまお尋ね者になってしまうことだろう。

だから、公爵が無理やり私を連れ戻そうとしてきたら、そもそも私たちに抗う術はないのだ。

公爵もそれを分かっただけで、強硬手段に出たのだろう。

十人くらいのお連れを率いてきているのは、最低限の保険といったところか。

そこまで理解したのだろう、シキがエルドさんをギロツと睨んだ。

「それならば、どうするっていうのだ？ アンをこのまま差し出せとでも言うのか？」

「いいや。そんなことするわけがないだろ。アンが嫌がる相手にアンを渡すなんてことは、死んで

もしない」

エルドさんはそう言うと、部屋の鍵を閉めて、近くにあった机などの家具を扉の前に置いて

いった。

突然のエルドさんの行動に首を傾げる。

「エルドさん。何をしているんですか？」

「バリケードを作ってるんだ。シキ、そこにあるベッドを入り口の前に移動してくれ」

エルドさんはそう言うと、シキと力を合わせて重そうな家具を部屋の入り口に移動させていった。

一通り家具の移動を終えると、エルドさんは窓を開け放って、私たちの方を振り向いた。

「よっし、逃げるぞ、アン。シキ」

「……え？」

私は淡々と言われた言葉を聞いて、間の抜けた声を漏らす。

シキはエルドさんの言葉を鼻で笑った。

「逃げるだと？ フェンリルの俺が人間ごときに尻尾を巻けと？」

「仕方がないだろ。これがアンを守る一番の方法だ。シキがフリードリッヒ公爵に手を出せば、契約しているアンが処罰されるかもしれないんだからな」

「ぐっ」

シキは何か言い返そうとして、言葉を飲み込んだ。

そのまま静かになったのを見て、エルドさんは眉尻を下げて笑う。

「それに、俺もアンを無理やり連れていかれそうになったら、我慢できるか分からないからな。戦術的撤退ってやつだ」

「……そういうことなら、仕方あるまい」

シキはそう言つて、体を伏せて私とエルドさんを見る。

「アン、エルド。俺の背中に乗れ」

「うん、分かった。ありがとうね、シキ」

私がそう言つてシキに跨ると、その後ろにエルドさんが跨った。

それと同時に、コンコンと扉がノックされた。

「アナスタシア。私だ、開けてくれないか？」

シキは扉の方をちらつと振り向いてから、すつくと体を起こして窓の方へと歩いていく。

「一気に街の外まで駆けていく。振り落とされんように、しっかりと掴まっている」

そう言うと、窓枠に足をかけて窓から飛び降りた。

そして、地面に着地するなり凄まじい速度で加速していく。

こうして、私たちは思いもしなかった形でミルドの街を出たのだった。

それからシキは、そのまま猛スピードで駆けていき、街がすっかり遠くなったところで私たちを下ろした。

「ふむ。ここまで来れば問題あるまい」

私とエルドさんはシキの背中から降りて、街の方角を見て目を細める。

「やっぱり、シキは速いね。もう街のかげも見えないよ」

「すごいな……ここまで一気に移動したぞ」

私たちがそんなふうに驚いていると、シキは満足げに尻尾を振っていた。

どうやら、シキも褒められるとそれなりに嬉しいらしい。

そんなことを考えていると、エルドさんがちらりと私の方を見た。

「さて、これからどうしようか。エルランドに戻るか？」

「いえ、多分エルランドの街に戻つても、そつちまであの人が追ってくるだけのような気がします」

「確かに、あれだけの執念と行動力があれば、すぐに見つかりそうだよな」  
エルドさんはそう言って洗い顔を拭いた。

このままエルランドに戻れば、数日はフリードリッヒ公爵のことを忘れて過ごせるかもしれない。それでも、いつかは結局バレて、また追われることになる。そうならないためにはどうすればいいか。

「あの人の目的を知っておきたいですね。それが分かれば、もしかしたら対処できるかもしれない。せん」

なぜフリードリッヒ公爵は私にそれほど執着するのか。

その理由を知ることができれば、解決するためのヒントが得られるかもしれない。

シキとエルドさんは眉根を寄せてから口を開く。

「ふむ。聖獣の力を使って、何かをしようとしているのかもしれない。人間の考えそんなことだ」  
「聖獣の力なんてのは、どこの国も欲しがる戦力だ。それをコントロールできる力が目の前に転がっていたら、何をしても手にしたいとは思うかもしれない。特に、それを国から期待されているとなれば余計にな」

私は二人の言葉に頷いて、腕を組んで考える。

「聖獣、家柄、血筋……なるほど。確かに、その線が強そうですね」

私を連れ戻したら、私の力を使って何かをしようとしているってことなのかな。

それなら、絶対にフリードリッヒ公爵のもとに行ったらダメってことだよな？

でも、フリードリッヒ公爵が聖獣であるシキに反応したのって、ほんの数回だった気がする。

それこそ、私を何回も訪ねてきた時、フリードリッヒ公爵の目にはシキが映っていないかったよな。

……だめだ。答えを出すには情報が足りなさすぎる。

私は頭を抱えて唸ってから、大きく頷く。

「とりあえず、情報を集めたいです。私の両親と出生に何かヒントがあるかもしれないので、そこを少し調べてみたいな、と」

私には両親に関する記憶がない。

もしも、私の両親のことを深く知る人に会って話を聞くことができれば、フリードリッヒ公爵が考えていることも、少しは分かるかもしれない。

それに、何も知らない両親のことを知る、いい機会かもしれない。

私はそう考えて、エルドさんとシキに真剣なまなざしを送る。

「二人とも、私に協力してくれますか？」

すると、二人はすぐに頷いてくれた。

「もちろんだ。喜んで協力するぜ」

「ああ。アンが知りたいというのなら、いくらでも力を貸そう」

私は二人にお礼を言って、これから向かう先を話し合う。  
こうして、本当の自分を知るための調査を始めることになったのだった。

## 第二話 新たな聖獣との出会い

「はあ、はあつ、うんしょっ」

僕——ペガサスのペスは、数年かけて掘り進めた穴を辿って、ようやく地上に頭を出すことができた。

それから、すっかりやせ細ってしまった胴体をその穴に通して、体全体を地上に出す。

「やったあ、ようやく出れた。ふう」

そんなひとりを漏らして、数年ぶりの地上の景色を眺める。

朝焼けの景色を見て感動していると、僕があけた穴の中から男たちの声が聞こえてきた。

「おい、あいつがいなくなってるぞ！」

「嘘だろっ！ 取り逃がしたってなったら、俺たちもただじゃ済まないぞ！」

「探せ探せっ！ どうせ弱ってんだから、すぐに見つかるだろ！」

僕はそんな男たちの声を聞いて、慌てて走り出す。

「やばい、早く逃げないと……って、うわっ！」

しかし、走り出してすぐに足を絡ませて転んでしまった。

嘘でしょ。数年閉じ込められていただけで、こんなに力が弱っちゃうの？

僕は自分の力が想像よりも弱くなっていくことに気づき、困惑してしまった。

いや、それだけじゃないかもしれない。

僕を捕まえる時に使っていた罠も特殊なものだったし、あの男たちは聖獣の力を制御する術を持つてるのかもしれない。

そんな男たちがいるところに数年間閉じ込められていたら、力が弱るのも当然か。

それでも、男たちの声が増えていくのが分かったので、すぐに立ち上がって走り出す。

「そうだった。アナスタシアを探さないと」

僕は走りながら集中し、あの人によく似た、アナスタシアの魔力を探す。

すると、遠くの方にあの人に似た魔力を感じた。

数年前に何とか捕捉した魔力は、ここ数年の間で驚くくらい大きなものになっていた。

多分、普通の人間の数倍以上の魔力だと思う。

「すごいっ、こんなに大きくなってると！ でも、なんだか魔力の波長がフェンリルとかに近いような気がするんだけど」

アナスタシアの魔力が普通の人間とは違うように感じて、首を傾げてしまう。

それでも、彼女の魔力を感じることができて、僕は喜びを隠せずにいた。

「よかった。まだちゃんと生きてくれていたんだ」

そんな言葉を漏らしながら、アナスタシアの魔力を辿って走っていく。

今、迎えに行くからね！

そう胸に誓って、弱くなった脚にぐぐっと力を入れて加速する。

気合が入ったおかげか、そのまましばらく走り続けることができた。

そして、僕を捕らえていた領主の領地から逃げだし、隣の領地の街が近づいてきた時だった。

さらに加速しようとして踏ん張ったタイミングで、足がずるっと滑ってしまった。

そして、僕はそのまま岩山から転げ落ちてしまう。

「え、うそっ！ いたっ！」

体を打ち付けながら、ゴロゴロと岩山を落ちていく。

慌てて背中の翼を羽ばたかせる。だけど、しばらく使っていないせいか筋力が弱まっていて、上

手く飛ぶことができない。

それでも、無理やり翼を羽ばたかせて、少しでも落下の速度を抑えようとする。

少しだけ体が浮いたと思ったんだけど、体勢を整えることはできず、結局そのまま岩山を転げ落

ちていく。

数十メートルほど転がってから、勾配が緩やかになったところでなんとか止まることができた。

僕は体を傷だらけにしながらも、ぐぐっと何とか立ち上がる。

「行かないと。アナスタシアのところにつ」

そして、足を引きずりながらアナスタシアのもとへと急ぐのだった。



私——アンたちはミルドを離れ、シユタルという小さな街に来ていた。

私の両親と出生について調べようというところまでは決まったのだが、情報があまりにもなさすぎる。

なので、とりあえず、近くの街で情報収集をしようということになったのだった。

ここもまだフリードリッヒ公爵の領地だ。フリードリッヒ家の娘を探していると言えば、何かし

ら情報を得られるかもしれない。

しかし、現実はそんなに甘くはないみたいだった。

私たちはテラス席のある軽食屋で頭を抱えていた。

「全然情報が出てこないな。まあ、こればかりは仕方がないことなんだが」

「この街には事情を知っている人はいなさそうですね。ほかの街の人に聞き込みもしたいですけど、どの街を目指せばいいのか見当くらしい付けなとですよね」

噂程度でも情報を集められればと思っただが、何も情報を掴むことができなかつた。成果が何も得られなかつたことに、私はガツクシと肩を落としていた。

「手掛かりとしては、私のお母さんが聖獣を使役していたこと。それとフリードリッヒ家の者だつてことくらいですもんね……もしかして、これだけの情報で事情を探るのつて無理だつたんでしようか」

そう言つて顔を俯かせると、エルドさんは私の頭の上にぼんつと手を置いた。

そして、ニカツと優しい笑みを浮かべる。

「そんな落ち込むな、アン。いつかアンの両親の情報もゲットできるつて」

「本当にそうでしょうか？」

「ああ、大丈夫だつて。シキもそう思うよな？ ……シキ？」

エルドさんがシキに話しかけるが、シキはあたりを見渡して眉をひそめていた。

私は首を傾げて口を開く。

「シキ、どうかしたの？」

「何やら視線を集めているようだ」

シキに言われて周囲を見渡してみると、確かにいつも以上にシキを見てくる人が多いような気がした。

「まあ、こんなにでかい使い魔を連れてるやつなんてそういないしな。珍しいから見るだけじゃ

ないのか？」

「でも、いつも以上に多くないですか？」

「いつも以上にか……そう言われれば、そんな気がしないでもないな」

エルドさんはあたりを見渡してから眉根を寄せる。

すると、その中でも私たちに強く視線を向けていた二人の男性が近づいてきた。

一人は興味津々にシキを見ていて、もう一人の男の人は気まずそうな顔をしている。

シキに興味を持つている男性は、興奮したように口を開く。

「突然申し訳ない。もしかして、そこにいるのはフェンリルとかだつたりするのかな？」

「え？ フェンリル、ですか」

私はどう答えたらいいか分からず考える。

これまではハイウルフで通していたし、大抵それで納得してもらえたので、まさか、いきなり言い当てられるとは思わなかつた。

顔くのは簡単だけど、ここで正直に答えたら、騒ぎになつちやうよね。

そう考えていると、私の代わりにエルドさんが答えた。

「いいや。こいつはハイウルフだ。フェンリルなんて大層なものじゃない」

「ハイウルフ？ こんなにでかくて、毛並みが綺麗なの？」

「なに、ただ大食いなだけさ。変な期待をさせてしまつて申し訳ないな」

エルドさんが笑って誤魔化すと、話しかけてきた男性はガツカリして肩を落としていた。  
なんだろ、そんなにフェンリルに会いたかったのかな？

首を傾げていると、気まずそうにしていた男性が笑いながら、私たちに話しかけてきた男性を肘で小突いた。

「ほらな。だから言っただろ。そんな簡単に聖獣に会えるわけないって。お前が見たってやつもただの見間違いだよ」

「いや、あれは本物だったって！ 背中に翼まで生えてたんだぞ！」

「だから、それが見間違いなんだって。現にフェンリルとハイウルフを見間違えたんだぞ、お前」興奮している男性はそう言われて、何も言い返せなくなってしまった。

背中に翼が生えた生き物？

ファンタジーなこの世界では、翼の生えた生き物は多くいるが、私はさっきまでの二人の会話が引っ掛かっていた。

『そんな簡単に聖獣に会えるわけない』って言っていたよね。

そのあとも、見間違いがどうか言っていたっけ。

そこまできて、一つの考えが頭に浮かんだ。

もしかしたら、この男性が見たのが、お母さんが使役していた聖獣だったりするかも！

完全に思いつきで、可能性は低いかもしれないが、ほかにお母さんの情報を探れるような手掛か

りは何も無い。

それなら、このチャンスを逃すわけにはいかないよね。

私はそう考えて、話しかけてきた男性を見上げる。

「あの！ お兄さんはどこかで聖獣を見たことがあるんですか？」

「あ、ああ。ついこの前まで仕事で街の外に出ているね。その時に見たんだよ」

私たちに話しかけてきた男性は、私が話にくくと嬉しそうに口元を緩めた。

やっぱり、この人は聖獣に会ったことがあるんだ。

それなら、シキにあれだけ真剣なまなざしを送っていたのも納得だ。

「ちなみに、どんな聖獣を見たんですか？」

「ペガサスだってよ。ペガサス。こんなところにいるわけないじゃない」

すると、もう一人の男性が、馬鹿にするように笑う。

ペガサスって、あのペガサス？

お兄さんが会ったのは想像以上にファンタジーな生き物だった。

私は目をぱちくりとさせてから、前のめりになって男性を見上げる。

「参考までにどのへんで見たのか教えてもらってもいいですか？」

「もちろん！ いやあ、誰も信じてくれなかったんだけど、お嬢ちゃんは信じてくれるのか。えっ  
と、ここから北に進んだところに——」

男性は嬉しそうに話しはじめた。

それから、男性は一通り話し終えると、私たちに手を振って、連れの男性と共に去っていった。

「これが本当なら、結構な有力情報だな」

エルドさんは男性が見えなくなつてから、腕を組んでそう呟いていた。

私はエルドさんの言葉に頷いてから、チラッとシキを見る。

「ねえ、シキ。聖獣ってどのくらいの確率で会えるものなの？」

「ふむ。俺もここ百年くらいはほかの聖獣と会っていない。ごく普通の男が、人生で二度も聖獣に遭遇そうごうすることなど奇跡に近いだろうな」

シキはそう言つて、私たちに話しかけてきた男性たちの背中をつまらなそうに見ていた。

「どうやら、シキはさっきの男性の話を信じていないらしい。」

正直、シキの言う通り、普通の人が何回も聖獣に会うなんてことはないのだろう。

それでも、ようやく掴んだお母さんの手掛かりを前に、スルーするなんてことはできない。

私はそう考えて、二人に真剣な眼差しを送る。

「確かに、あの男性の見間違いかもしれません。それでも、それを確かめるためにも聖獣を追いかけたいです。もしかしたら、お母さんが使役していた聖獣かもしれないので」

「私がそう言つと、二人は一度顔を見合わせてから力強く頷いた。」

「そうだな。ほかに情報もないわけだし、それが一番いいだろうな」

「もしも、男の話が本当なら、アンの母親に使役されていた可能性はあるだろう。聖獣がそう何匹もいるとは考えづらいからな。ここから遠くもない場所のようだし、向かつてみるとするか」

こうして、新たな情報を手に入れた私たちは、男性がペガサスを見たという場所に向かうことにしたのだった。

それから、私たちはまたシキの背中に乗って移動することに。

馬車を借りていこうという話も出たのだが、相手がペガサスなら馬車では追いつけないだろうというので、またシキの背中に乗せてもらうことになったのだ。

シキはしばらく順調に走っていたのだが、急に何かを感じ取ったのか足を止めた。

「シキ、どうかしたの？」

「……どうやら、あの男の話は嘘ではなかったようだな」

そう言ったシキは、遠くの方をじっと見ている。

私はそんなシキの反応を見て、「あっ」と小さく声を漏らす。

「もしかして、ペガサスが近いの？」

「ああ。ペガサスのような魔力を感じる。感じはするのだが……非常に弱まっているな」

「弱まっている？ どういうこと？」

「なぜかは分からん。だが、魔力も不安定だし、かなり弱まっているのは確かだろうな。動く気配

も感じられん」

シキは遠くを見る目を細めてそう言った。  
すると、エルドさんが言いにくそうに口を開いた。

「それって……今にも死にそうってことか？」

「ああ、おそらくな。このままでは長くはもたないだろう」

シキが静かに頷いたのを見て、私は前のめる。

「大変、すぐに助けないと！ シキ、急いで向かえそう？」

「ああ、急ぐとしよう」

シキはそう言うのと、また勢いよく走りだした。

山道を一気にかけ上がっていき、軽く山々を飛び越えていった。

少しすると、シキは突然岩山を下り出す。

あまりにも荒々しく下っていくので、私とエルドさんは顔をこわばらせる。

「おい、シキ！ ちょっと速すぎるぞ!？」

「シ、シキ？ ……ん？」

私たちは突然のシキの行動に驚き、声を上げる。

しかし、すぐに岩山の下から微かな魔力を感じとって、私は言葉が続ける。

「もしかして、この小さな魔力がペガサス？」

「気づいたか、アン。魔力を辿ってみたところ、ちょうどこの下にいるようだな」

シキは足で踏ん張りを利かせながら岩山を下っていくと、あたりを見渡してすぐに走り出した。

「見つけたぞ。アン、見えるか？」

「う、うん」

岩山の下を走っていくと、徐々にその姿が見えてきた。

白い子馬のような体に、背中から生えている二つの翼。

その要素だけ切り取れば、誰もがペガサスだというだろう。

しかし、私の視界にいるペガサスは、想像していたものと大きく違っていた。

毛並みは薄汚れてしまっていて、翼も油分が多くしなっている。そして、全身傷だらけ。

そんな状態で、弱々しく歩いていた。

今にも倒れちゃいそうなくらい弱ってる……。

「あれがペガサス、なのか？」

エルドさんは怪訝な顔で私たちの前を歩くペガサスを見ていた。

どうやら、エルドさんも私と同じようなことを感じているらしい。

「おそらく、そうなんじゃないでしょうか」

そう答えた時、ペガサスが足を止めて、ふらっとこちらを振り向いた。

「あ、あれ？ いつの間にか後ろにアナスタシアの魔力がある。どうということだろ？」

ペガサスはそのようなことを呟きつつ、首を傾げていた。  
あれ？ あのペガサス、私のことをアナスタシアって言った？

それから、ぼうつとした目で私たちのことを見つめてくる。

私たちがシキに乗ったままペガサスの目の前まで近づいていくと、ようやく焦点しょうけんが合ったような目をした。

そして、目を見開いて私たちを見た。

「フェ、フェンリル!? なんてこんなところに？ アナスタシアの魔力がしたはずなのに!」

「なんだこいつは。やけにリアクションがでかいやつだ」

シキはペガサスを見て目を細めている。

やつぱり今、アナスタシアって言ったよね？

私はシキに驚いている。ペガサスの顔を覗のぞき見る。

「アナスタシア……。私のことを知ってるの?」

「アナスタシア!? やつぱり、アナスタシアじゃないか!」

私が聞くと、ペガサスは一瞬首を傾げてから、また驚いて声を上げた。

それから、尻尾をぶんぶんと振って嬉ほしそうに微笑ほほえむ。

やつぱり聞き間違いじゃなかったみたいだ。

この子、私を見ながらはつきりと私のことを『アナスタシア』と呼んでいる。

ペガサスは興奮した様子でまくし立ててくる。

「アナスタシア! 探したよ、やっと会えた! びっくりした、まさか赤ちゃんだった君が、こんなに大きくなってるとなんて!」

「貴様、アンとはどういう関係だ」

ペガサスが私に顔を近づけると、シキは警戒けいけいして距離を取った。

遠ざかった私を見て、ペガサスは残念そうに眉尻を下げてから首を傾げる。

「僕? 僕はアナスタシアの、アナスタシアの……」

ペガサスはそのままで言うと、突然体をぐらつと揺らした。

そして、ペガサスはそのまま力なくその場に倒れてしまった。

「だ、大丈夫!」

私はシキの上から飛び降りると、ペガサスに駆け寄る。

すると、ペガサスは苦しいはずなのに、無理やりといった様子で笑みを浮かべた。

「だ、大丈夫。ちょっと、気が抜けただけだよ」

「気が抜けただけって、本当にそれだけ?」

私が目をじっと見ると、ペガサスは私から視線を逸そらした。

それから、言いにくそうに口を開く。

「……ずっと閉じ込められていたせいで、体に力が入らないんだ。ご飯もしばらくももらえてなかつ



「だからね」

「そんなっ、誰がそんなひどいことをっ」

「僕にもそれは分からないんだ。なんか物騒ぶつそうなことを手伝えって言われて、断ったらそんな扱いをされたんだよ」

ペガサスは憔悴しやうすいした様子でため息を吐いた。

閉じ込めてご飯もまともにももらえないってことは、監禁かんきんされていたってこと？

聖獣を使って何をしようとしたのか分からないけど、なかなか物騒な話だ。

私がそう考えていると、シキが近づいてきて、ペガサスをじつと観察する。

「アン。いろいろと聞きたいことはあるが、それはこいつの意識がはっきりしてからの方がよい。このままでは衰弱すいじやく死する恐れがあるぞ」

「衰弱死って、そんなにまずい状態なの？」

「今すぐというわけはないが、そうなる危険性はあるだろうな」

シキは眉根を寄せてそう言った。

よく見てみると、私でもペガサスの魔力が不安定なのが分かった。

確かに、この状態でい続けたら大変なことになりそうだ。

衰弱しているのなら、それを回復させる術を私は持っている。

私は顔を上げてエルドさんとシキを見た。

「それなら、私の魔法の調味料で作った料理を食べさせるのはどうかな？ ポイズンモスの被害に遭った人たちも救えたいし、この子にも効くんじゃない？」

「ああ、それがいいかもな」

エルドさんは私の言葉を聞いて頷いた。

「魔法の調味料？ アナスタシアが僕のご飯を作ってくれるの？ 嬉しいけど、今の状態で食べられるかなあ」

「安心しろ。アンの料理を前にすれば、食欲なんてすぐに湧いてくるからな」

エルドさんはペガサスにそう言うことから、あたりを見渡して腕を組む。

「……確か、ここに来る途中に街があっただろ？ その設備を使わせてもらうのはどうだ？」

「そうですね。その街で食材と調理場を調達しましょう。シキ、この子をあの村まで運べそう？」

シキは街がある方を見て頷く。

「ふむ。来る時に見た小さな街か。あそこまでならこいつを運ぶのもたやすい」

シキは体を伏せて、私たちに背中に乗るように促した。

「アンとエルドを村に届けてから、俺がまたこいつを回収しにこよう」

私はシキの背中に飛び乗って、伏せた状態のペガサスを見る。

「すぐに迎えにくるから、少しだけ待っててね！」

「……うん。分かったよ。ありがとうね、アナスタシア」

ペガサスはそう言って、力なく笑っていた。

本人は大丈夫そうにしているけど、すぐにでもご飯を用意してあげた方がいいよね。

私はそう考えて、シキに急いで街まで運んでもらうのだった。



近くの街——モルンに着いた私は、急いで料理の準備に取り掛かろうとしていた。

エルドさんと市場に向かって走りながら、指折りする。

「調理場を借りて、食材を買って、料理をして……やるのがたくさんありそうですね」

「そうだな。問題は、調理場をすぐに貸してもらえるかどうかだな。まあ、そこは交渉次第か」

エルドさんはそう言って、眉間にしわを寄せる。

私は頷いて口を開く。

「でも、初めて会う私たちに調理場を貸してくれるでしょうか？」

「まあ、簡単にはいかないだろうな」

エルドさんはそう言って渋い顔をしていた。

普通に考えたら、見知らぬ相手にいきなり台所を貸してくれる人はいないだろう。

それでも、何とか貸してくれる人を探さないと、ペガサスの命が危ない。

そんなことを考えながらあたりを見渡していると、何やら言い合いをしている男女の声が聞こえてきた。

視線を向けてみると、そこには大きな鍋かまで何かを作っている女性と、その隣の屋台でたくさんの木箱に入った何かを売っている男性の姿があった。

「おいおい、今日中にこれを使い切らないと味が悪くなっちゃうんだろ？ それだけの在庫を抱えてどうすんのさ」

「仕方がないだろ。本当は少しだけ仕入れるつもりだったんだが、向こうが押し売りしてきたんだって」

従業員っぽい女性と店主らしき男性が言い合いをしているようだった。

私が足を止めると、エルドさんも私につられて足を止めた。

「なんだ？ 何か揉め事か？」

「そうみたいですわね。あれ？ あれって……」

「アン？」

私は木箱から覗いている見覚えのある食材を見て、思わず近づいていく。

紙でまとめられているあまりにも細すぎる乾麺かんめん。

私はそれを見ながら、【全知鑑定】——調味料などの原材料を調べられるスキルを使用した。

すると、小さな画面が現れて【全知鑑定】の結果が画面に表示された。

### 全知鑑定…米粉こめこそうめん

#### 米粉で作られたそうめん

「やっぱり、そうめんだ」

私は前世で何度も食べたあの味を思い出す。

つるつると喉のどを通して、食欲がない時でも食べられる。確か、消化にもよかつたはず。

あのペガサスは食べられるか分からないと言っていたから、今の状況にぴったりかもしれない。そう考えていると、男性が私に気づいて視線を向けてきた。

「おっ、買っていくかい？ お嬢ちゃん可愛いから、今なら少しサービスしちゃうよ」

「あの、そうめんは買わせていただきたいんですが、できれば少しだけ調理場を借りたくて……」

私はそう言っつて、鍋を温めている女性を見る。

「調理場？ うーん……今使ってるし、ちよつと難しいね」

「そ、そうですね」

私は女性の言葉を聞いて、ガックシと肩を落とす。

やっぱり、そう簡単にはいかないみたいだ。

すると、私たちのやり取りを見ていたエルドさんが近づいてきた。

「何かと思ったらそうめんか。アン、このそうめんを使って何か作るつもりだったのか？」

「はい。これならすぐにできますし、消化にもいいかなって思ったんですけど」

私がそう言うと、エルドさんは腕を組んで考える。

それから、たくさんそうめんが入っている木箱を見てから続ける。

「アン。それは大量に作っても手間はそんなに変わらないのか？」

「え？ そうですね。そんなに変わらないんじゃないかと」

「なるほど。よっし、少しらせてくれ」

エルドさんは私の肩にぼんっと手を置いてから、男性の方に視線を向ける。

「店主……だよな。これって今日中に売り切らないとんだろ？」

「え？ ああ、さっきのやりとり聞かれてたのか。実はそうなんだよ」

店主さんは気まずそうに頬を掻いた。

その返事に、エルドさんは口元を緩める。

「それなら、このそうめんをあるだけ全部買わせてくれ。その代わりに、少しかだけ調理場を貸して欲しい」

「全部!? そりゃあ、本当か!？」

エルドさんの言葉を聞いた店主さんはがたつと前のめりになった。

パッと見ただけでも箱は七つか八つはある。

これを全部買ったなら、結構な値段になるような気がする。

「え、エルドさん。そんな量買ったって、調理はできても消費できませんよ？」

「ああ。もちろん、俺たちだけで食べるんじゃないさ」

エルドさんは私に笑みを向けてから、すぐに店主さんに視線を戻す。

「調理場を貸してくれば、全部買っていく。ただもう一つだけ条件がある」

「条件？」

エルドさんはそこまで言うと、ちらつと店主さんの隣で料理を売っている女性を見た。

「せっかく屋台があるんだ。俺たちがそうめんを料理を作るから、ついでに俺たちの作った料理も売って欲しい。それで、そうめんの買い取り額から利益分を引いた額を払おう。黒字になれば、その分を人件費にしてくれて構わない」

「なるほど、そうきたか」

店主さんはエルドさんの言葉を聞いて、腕を組んでしばらく考える。

それから、何か腑に落ちないことがあったのか、首を傾げた。

「それだと、おたくのメリットがなくないか？」

「調理場を貸してもらえる。今の俺たちには、それだけで十分なんだ。アンもそれでいいよな」

「はい！ 調理場を貸してくれるのなら！」

私がエルドさんの言葉に頷くと、店主さんの隣にいた女性が大きな鍋を調理場からどかしてく

れた。

それから、見てニツと笑う。

「そういうことなら、断る理由がないね。ここを好きに使ってちょうだい」

「そうだな、いいぞ」

店主さんも続けて頷いた。

「あ、ありがとうございます！」

私は女性と店主さんに深く頭を下げる。

それから、顔を上げてエルドさんを見る。

「エルドさんありがとうございます！」

「まあ、これくらいはな。それよりも、さっそく料理を開始しよう。アン、俺も手伝うけど基本的には任せるぞ」

エルドさんはそう言って、笑顔で私の頭を撫でた。

私は頷いて、気合を入れて両手のこぶしをきゅつと握る。

「はい！ 任せてください！」

それから、私たちは必要なほかの材料を買ってから、料理を開始するのだった。

さて、ここからは料理の時間。

買ってきた材料は三つ葉とシイタケのようなキノコ。そして、この市場で購入したそうめん。

「それじゃあ、作っていきます」

「おおっ。何か俺に手伝えることがあったら教えてくれ」

「そうですね。それじゃあ、三つ葉を一口大に切ってもらっていいですか？」

私はエルドさんが三つ葉を切っている隣で、店主さんと女性に見られないよう体で隠しながら、大きな鍋に手のひらを向ける。

……急に手のひらから調味料が出てくるって、普通に考えたらびっくり映像だもんね。

それから、私は他の人に見られないようにしながら、頭の中で魔法のめんつゆのイメージを固めていく。

魔法のめんつゆは以前に作ったことがあるから、作り方とイメージはできている。

あとは、それをベガサスの状態に合わせてマイナーチェンジをするくらいだ。

あれだけ弱ってるんだから、滋養強壮はマシマシの方がいいよね。

以前作った時、治癒魔法と滋養強壮の効果は中になった。

それなら、あの時よりも込める魔力を多くすれば、効果が大きくなったりするかな？

私がいめんつゆを作る上で必要なものを頭に思い浮かべると、すぐに小さな画面が表示された。

### 全知鑑定…めんつゆの材料

それから、私は【全知鑑定】によって表示されている材料を目で確認しながら、そこにめんつゆの味と触感と香りと舌ざわりをイメージしていく。

そして、滋養強壯と回復魔法をマシマシにするために、魔力を強めに込める。

それを形成するイメージを膨らませて【創作魔法】を使うと、大きな鍋の中がカツと強い光を放った。

光がやんでから鍋を覗き込み、口元を緩める。

「……うん、できてみたい」

大きな鍋に入っている液体は、醤油を少し薄くしたような色をしていた。

指の先に付けて舐めてみると、すっきりとした味わいの中に奥深さがあるような、上品なめんつゆの味が広がってきた。

「うん。味は前と同じ感じだね。あとは付与された魔法がどうなってるかだけ……」

私はそんなひとり言を漏らしてから、【全知鑑定】のスキルを使用した。

すると、めんつゆの材料を書いていた画面の文字が別の文字に変わっていった。

### 全知鑑定：魔法のめんつゆ

日本のめんつゆを模して作ったもの。

付与効果『治癒魔法・大』『滋養強壯・大』

「よっし、こつちも成功だ！」

私はそこに表示された文字を確認して、小さくガッツポーズする。

「アン。こつちは切り終わったぞ。おおつ、そつちも魔法のめんつゆの準備は万全みたいだな」

「はい。それじゃあ、あまり時間はかけられないので、パパッと作りましょうか！」

私はそう言って、さっそく料理に取り掛かることにした。

まず初めに、めんつゆを水で割って米粉そうめんを使うスープを作っていく。

あとはそこにシイタケのようなキノコをたくさん入れて、シイタケに火が通るまで待つ。

正直、干しシイタケを使いたいところだけど、とても干しシイタケを戻している時間はないので、今回は普通の生のシイタケを使用する。

まあ、魔法で作っためんつゆの方にダシの風味とかも十分に含まれているし、これでスープの方は問題ないはず。

あとは、エルドさんに切ってもらった三つ葉を入れて、軽く火を通せばスープの方は完成だ。すると、店主さんが鍋の中を覗いて感動の声を漏らす。

「おおつ、なんだこのいい匂いのするスープは」

「お嬢ちゃん。いつのまにこんなスープを作ったんだい？」

その隣で、女性の方も匂いを嗅いでとろんとした顔をしていた。

やっぱり、めんつゆはどの街でも人気が出そうだ。

すると、それを見ていたエルドさんも鍋を覗く。そして香りを嗅ぐと少し目を大きくした。

「どれ？ おおっ、いつもよりもいい香りだな」

「はい、今回はシイタケが多めに入っているので香りもマシマシです！」

私はエルドさんにそう返しつつそうめんを茹でようとして、ピタッと止まる。

あとはそうめんを茹でるだけだけど、早く茹ですぎても伸びちゃうよね。

私はシキがどこまで来ているのか確かめるために、【魔力感知】でシキの魔力を探る。

すると、シキの魔力がもうすぐ近くまで来ているのが分かった。

「うん。これなら、茹でちゃっていいよね」

私は店主さんから買ったそうめんを二食分だけ茹でる。

そして、温かいスープと茹で上がったそうめんを、温かいまま器に移す。

「できた。【温米粉そうめん】」

盛られた器から出てくる湯気が鼻腔をくすぐり、私の空腹を刺激してくる。

……お昼ご飯を食べた私でも、スルッと一杯食べたくなっちゃう。

これなら、きつと元気がないペガサスでも食べてくれるよね。

「アン！ シキが来たみたいだぞ！」

「タイミングばっちりですね」

私はそう言って、調理場から出て、近づいてくるシキに手を振る。

すると、近づいてきたシキと、シキに背負われたペガサスを見て、店主さんと女性が眉根を寄せた。

「大きな白い魔物と、白い翼の生えた馬？」

「え？ もしかして、フェンリルとペガサスなのかい？ いや、さすがにそんなはずないよね。で

も、特徴がどう見てもそれにしか見えないんだけど……」

シキはともかく、ペガサスの方は誤魔化しようがないよね。

「……おそらくですが、ペガサスですね。道で倒れていたの、ご飯を作ってあげたくて」

私は頬を掻いて誤魔化すように笑ってから、器を地面に置く。

「シキ。ペガサスの容態は？」

「さつきとあまり変わらん。ただ街に入ってから、この匂いが気になって仕方ない様子だったな」

シキは背負っているペガサスを下ろして、微かに笑みを浮かべた。

シキの反応を見る限り、そこまで緊迫した状態ではないってことかな？

私はペガサスのすぐ近くに座って、温米粉そうめんの入った器をペガサスの前に置く。

「ほら、食べて元気出してね」

ペガサスは顔だけ動かして温米粉そうめんを見た。

「すんすんっ、アナスタシアがこれを作ってくれたのかい？」

「そうだよ。いろいろ魔法も付加してあるから、食べたら元気出ると思うの」

「確かに、不思議と食欲をそえられるかも」

ペガサスが温米粉そうめんの匂いを嗅いでいると、シキが胸を張る。

「アンは料理で多くの人間を救ってきた。その料理にありつけることを感謝するんだな」

ペガサスはシキの言葉を聞いて、感心するように息を漏らした。

「へえ、そうなんだ。それじゃあ、とりあえず、一口」

それから、ペガサスはそうめんとスープをすすり、咀嚼した。

すると、カッと目を見開いたかと思うと、一心不乱に温米粉そうめんを食べ始める。

「うまつ！ 何これ!? あっさりしているのに、コク深いスープが麺に絡んで……こんなにおいしい

いものは初めて食べたよ！」

ペガサスはさつきまで衰弱しきっていたはずなのに、今はただ目の前の食事にがつつく食いしん

坊になっていた。

これだけ喜んでもらえると、作った甲斐がある。

私は気持ちのいい食いつぶりに思わず笑ってしまう。

「もう少し食べられそうなら、もつと麺を茹でるけどどうする？」

「もちろ！ たくさんちょうだい！」

「分かった。ちょっと、待っててね」

私はペガサスにそう言うてから、立ち上がってまたそうめんを茹で始める。

スープはまとめて作ってあるし、ただそうめんを茹でるだけだから、おかわりもすぐに出せる。

今回作る料理はこれにして大正解だったかもしれない。

「あれ？ なんかずごい人だからできてます？」

私がそうめんを茹でていると、近くを通った人たちが立ち止まって、ペガサスが食べている温米

粉そうめんや、茹でているそうめんを興味深そうに見ていた。

店主さんの隣の女性が眉尻を下げて笑う。

「そりゃあ、こんないい匂いのものを茹でてれば、人も集まるよ」

「すげえや、こんなに人が集まることなんてこれまでなかったのにな」

店主さんは店の前に集まる人たちを見て、驚いてそんな言葉を口にしていった。

エルドさんが私の肩をぼんっと叩く。

「アン。アンはペガサスの面倒を見てやってくれ。俺はこの人たちの対応をするからさ」

「分かりました。エルドさん、よろしくお願いします！」

私はエルドさんにそう言うてから、茹で上がったそうめんが入った器を二つ持ってペガサスとシ

キのもとに向かい、地面に器を置いた。

「おまたせ。こっちはシキの分ね。シキ、ミルドの街を出てからいろいろ頑張ってくれたから」  
すると、シキは私の言葉を聞いて嬉しそうに尻尾を振った。

「そういうことなら、ありがたくいただくよう」

シキはそう言うなり、温米粉そうめんをおいしそうに食べた。

……私もあとで食べようかな。

そんなことを考えつつちらつと後ろを見ると、さっそくエルドさんが集まった人たちに温米粉そうめんを売っていた。

そして、温米粉そうめんを食べたお客さんたちは、口々に感動の言葉を漏らしていた。

「うまつ！ なんだこの奥深い味わいは！」

「こんな高級な味がこの値段？ なんだ、店主は自棄にでもなったのか？」

「するする入っていくぞ！ もう一杯くれ！」

そんな声がさらに人を呼び、私たちが来る前は人が少なかった屋台の前には行列ができていた。

そんなお客さんたちを見て、店主さんと隣の女性は口を開く。

「すごい売り上げだな。こりゃ、あの噂の屋台みたいじゃないか」

「噂のって、あの『アンの料理屋』のことかい？」

私は二人の会話を聞いて、思わず「え」と声を漏らす。

「『アンの料理屋』を知ってるんですか？」

「そりゃあ、今時店をやっている知らない人なんかいないだろ。あれ？ そういえば、お嬢ちゃんの名前って……」

それから、店主さんと女性は何か気づいたように目を見開いた。

そうして私たちの正体がバレると、温米粉そうめんはさらに飛ぶように売れていったのだった。

結局、屋台の売り上げがすごかったらしく、そうめんの在庫の料金は払わなくてよくなってしまうのだった。



ペガサスに温米粉そうめんを食べさせたあと、少しして私たちはお店を店主さんたちに任せて宿に移動した。

そして、お腹いっぱいになったペガサスを寝かせた翌日。

「う……んっ」

「あ、おはよう、アナスタシア」

私がベッドの上で目を擦りながら起き上がると、そこにはふわふわで真っ白な毛並みをしたペガサスがいた。